



VOICE OF TAKERU 2018

〈 ボイス オブ タケル 〉



大淀町地域遺産創生シンポジウム資料集



ご挨拶

錦秋うるわしい季節となりました。本日ご来場いただきました皆様におかれましては、ますますご清祥の事とお喜び申し上げます。

また平素は、大淀町の歴史・文化事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、奈良県内でも有数の大河・吉野川に面し、里山の豊かさに育まれた本町は、縄文時代以来、人々の行き交う吉野文化の門戸として栄えてきました。その人と自然のかかわりによって生み出された歴史・文化遺産は、何事にも替えがたいふるさとの「宝」です。

本町では、これらを「地域遺産（おおよど遺産）」として掘り起こし、次代につなぐ取り組みとして、平成28年度から「大淀町地域遺産創生事業」をおこなっています。

今年度は、本町の西北部・今木の里にある「保久良（ほくら）古墳」ゆかりの人物で、生まれつき声が出せず、8歳でこの世を去ったと『日本書紀』に伝わる、天智天皇の皇子・建（たける）にスポットをあてます。著名なマンガ家・里中満智子先生の講演、パネルディスカッションや朗読劇を通じ、謎に包まれた皇子の実像と伝承に迫ります。

なお、本シンポジウムは昨年10月、「第32回国民文化祭・なら2017 第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」の一環として開催を予定しておりましたが、台風の接近に伴い中止となりました。それをふまえて今年度、新たに〈ボイス・オブ・タケル〉実行委員会を立ち上げ、奈良県・大淀町の支援と、地元今木区の協力を得ながら準備を進め、万感の思いでこの度、開催の日を迎えることができました。これを機に、建皇子の「声」が、より多くの人々に響くよう願っております。

最後になりましたが、本シンポジウムを開催するにあたり、ご協力いただきました関係各位、ご支援いただきました皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

平成30年11月

主 催 者

ープログラム・目次ー

13:30～13:40 開会の挨拶

13:40～14:10 オープニング

声と音、いにしえを語る「かぜの子 たけちゃん」・・・・・・・・・・ 1

○出演：渡邊直加（語り）・kawole（歌）

14:10～14:20 休憩

14:20～14:50 <第1部：基調講演>

里中満智子氏（マンガ家）「古代史のなかの建皇子」・・・・・・・・・・ 3

14:50～15:00 募集作品の表彰（特選賞受賞者）

15:00～15:10 休憩

15:10～16:20 <第2部：パネルディスカッション>

○パネラー：里中満智子氏

桐村英一郎氏（元朝日新聞社記者）・・・・・・・・・・ 7

松延秀一氏（近畿歴史研究グループ正会員）・・・・・・・・・・ 15

松田 度（大淀町教育委員会学芸員）・・・・・・・・・・ 23

○コーディネーター：川村優理氏（NPO 法人うちのの館館長・作家）・・・・・・・・ 31

16:20～16:30 閉会の挨拶

☆資料☆

・大淀町今木・保久良古墳について・・・・・・・・・・ 33

・『VOICE OF TAKERU』募集作品について・・・・・・・・・・ i

・『VOICE OF TAKERU』特選賞受賞作品「たけるのにじ」（四葉るりこ）・・・・・・・・ ii

声と音、いにしえを語る かぜの子 たけちゃん

皇子が眠る、保久良古墳

風はこたえ 木々はうなずき 鳥はうたい 蝶は舞う

そして ゆっくりとかたつむりが這う

ここにある気配 無数の語り部たちにこころをすませる

はるかかなたより聞こえてくる声なき声をきく

いにしえのときとともに織り成し それぞれの祈りをもって

「たけちゃん」をおもう

ちいさな皇子とその丘とともに 時を紡ぎ生まれた物語

いま ながき沈黙のときおわり ひかりのとき おとずれる

【脚本・演出・語り】

渡邊直加 (わたなべ なおか)

物語作家。ストーリーテラー。やらだ出版 (<http://yalada.jp>) 主宰。CD付絵本「ぼくはうま」「やどかりの夢」などを出版。影絵や音楽朗読劇など、様々なかたちで国内外での公演を行う。保久良古墳建皇子のお話「かぜの子たけちゃん」の素語りを9年前よりはじめ、同時期に旅をしたオーストラリアのアボリジニの森の体験とお話がみなもと。

【声・歌・太鼓】

Kawole (かおる)

歌手。奈良生まれ。雄大な海、水と森の大地ブラジル、アルゼンチンや南米諸国にわたる山と風の歌、唱歌や歌謡曲を取り上げ日本のうたで綴るプロジェクトなど、さまざまに独自の表現を交えながら打楽器とともに歌い繋ぐ。声の瞑想会や朗読会など声と音、言葉にまつわる活動も各地で開催している。
(<http://kawolinha.wixsite.com/kawole>)



特別協力：

字・和田江美子
協力・松岡英輝

手話翻訳・金子文絵
影絵装置・廣田潔

舞指導・小谷野哲郎



建皇子（絵：里中満智子）

古代史のなかの建皇子



さとなか まちこ
里中 満智子

プロフィール：

1948年大阪市生まれ。マンガ家。

1964年高校在学時に「ピアの肖像」で第1回講談社新人漫画賞を受賞。プロとして活動に入る。1974年「あした輝く」「姫がいく！」の両作品で講談社出版文化賞受賞。1982年「狩人の星座」講談社漫画賞。

子供から大人向きまでジャンルを問わず幅広い分野で作品を発表し、現在までに500タイトル近くの作品を描く。代表作に「アリエスの乙女たち」「あかね雲」「海のオーロラ」「あすなる坂」「狩人の星座」「スポットライト」「愛人たち」「北回帰線」など。歴史を扱った作品も多く「女帝の手記」「長屋王残照記」「アトンの娘」「ギリシア神話」「旧約聖書」「古事記」など多数。持統天皇を主人公とした「天上の虹」は32年をかけて2015年3月に完結した。2006年に全作品及び文化活動に対し文部科学大臣賞受賞。2010年文化庁長官表彰受賞。2013年度『マンガ古典文学/古事記』古事記出版大賞太安万侶賞受賞。2014年外務大臣表彰受賞。2018年文化庁創立50周年記念表彰受賞。

〈その他の役職〉

公益社団法人日本漫画家協会理事長／一般社団法人マンガジャパン代表理事／デジタルマンガ協会会長／NPO アジアマンガサミット運営本部代表／大阪芸術大学キャラクター造形学科教授学科長／朝日新聞社手塚治虫文化賞選考委員／外務省国際日本漫画賞審査委員長／文化庁古都壁画の保存活用に関する検討委員会委員／国土交通省社会資本整備審議会都市計画・歴史的風土分科会委員／国土交通省歴史的風土部会 明日香村小委員会委員／文化庁日本遺産選定委員会委員／財団法人宇宙フォーラム顧問／公益財団法人 CG アーツ協会理事／公益財団法人四国村民族博物館理事 評議員／公益財団法人古都飛鳥保存財団理事／一般社団法人出版ADR理事／公益財団法人一ツ橋総合財団理事／奈良県文化振興有識者会議委員／豊島区アート・カルチャー都市懇話会特別顧問／（仮称）マンガの聖地としまミュージアム展示・建築設計検討会議委員

建皇子は中大兄皇子(天智天皇)の息子であり、もし長生きすれば天皇位についていたかもしれない。同母姉の讚良皇女は、のちに持統天皇として即位している。

しかし建皇子は「生まれつき口がきけず、わずか8歳で亡くなった」と記されている。歴史上何かを成し遂げたわけでもなく、ただ「そういう皇子がいた」ということしか、事実としては伝えられていない。だが、なぜか現代人の心を惹きつける。その理由は…

建皇子の父である中大兄皇子は、蘇我氏から実権を取り戻すために、中臣鎌足(のちの藤原鎌足)や倉山田石川麻呂(蘇我氏の有力者ではあるが、本流の蝦夷、入鹿親子に対抗する非主流派)と手を組み、乙巳の変(いわゆる大化の改新)を成し遂げる。

蘇我本流を倒した後、どういう事情か協力者であった倉山田石川麻呂を謀反の疑いで自害に追い込む。この石川麻呂の娘が遠智娘。中大兄に嫁いで、長女大田皇女、次女讚良皇女(のちの持統天皇)を生んでいた。父が夫に追いつめられて自害する。こんな事態は通常の神経では耐えられない悲劇だ。遠智娘は正気を失くしたと言われている。

そして、そのような状態で中大兄との間に3人目の子を産み、亡くなる。後にはまだ幼い2人の女の子と生まれたばかりの建皇子が残された。

3人の子にとって母の死の原因は父にあるのだから複雑な生い立ちと言える。建皇子が口をきけなかったのは「母の体調や精神状態が正常ではなかったせい」とも伝えられているが、医学的には何の根拠もない。

中大兄皇子の母である斉明天皇は、孫の建皇子をことのほか可愛がったらしい。建

皇子が亡くなった時に「私が死んだら必ず建と一緒に葬ってほしい」と部下に命令した。その時に詠んだ歌が『日本書紀』に記されている。

いまき^{いまき}おむれ^{おむれ}
今城なる小丘が上に雲だにも
著^{しる}くし立たば何か嘆かむ

今城(今の淀町今木と思われる)に建の墓を作った。そこにせて雲が湧き立てば、建の魂だと思えるので、嘆くことはない。

(他2首)

また、建の死後紀の湯に行幸した際にも歌を読んでいる。

山越えて海渡るともおもしろき
今城^{うち}の中は忘らゆましじ

山を越えて海を越えて風景は見ごたえがあっても、今城の中にいるあの子ほど楽しい存在はなかった。忘れられない。

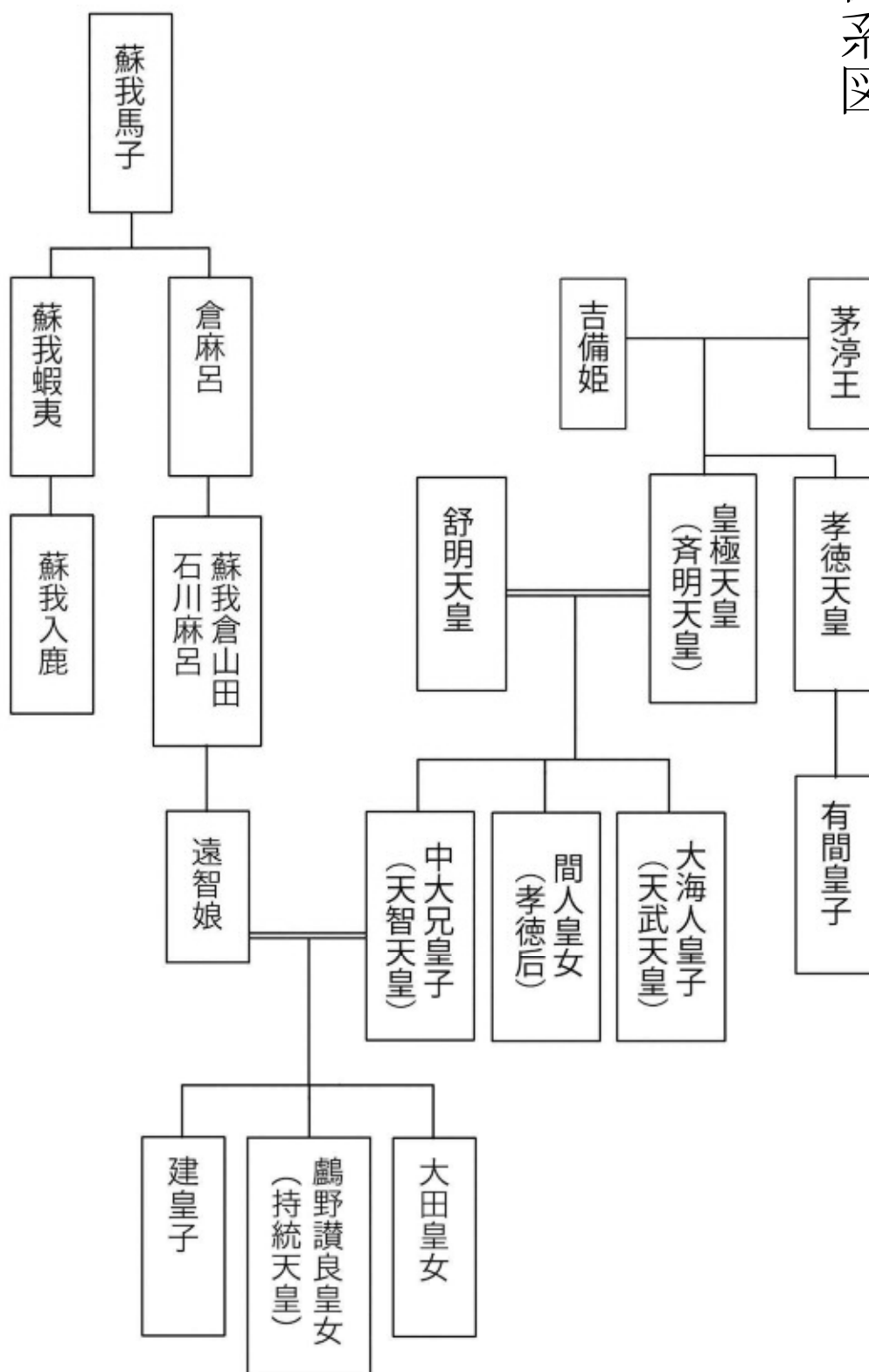
(他2首)

これらの歌から「天皇である前に一人の祖母であった斉明天皇の哀しみ」と、「天皇をそこまで哀しませ、死後共に埋葬されることを願われた建皇子の愛らしさ」が伝わってくる。

明日香村の牽牛子塚古墳は斉明天皇陵の可能性が限りなく高い。内部は2コーナーに仕切られていて、どうやら「もう一人」は間人皇女らしい。この陵からわずか20mしか離れていない越塚御門古墳は大田皇女(建皇子の姉)の墓らしい。

「一緒に埋葬して」と天皇が頼んだ建皇子はどこに…? 亡くなって最初に葬られたその場所にそのまま眠っているとしたら…「今城」の地がそうだと思います。

関係系図





『VOICE OF TAKERU』 入選賞・受賞作品「皇子の琥珀」(絵 守野聡子)

許されぬ恋の結晶

はじめに

1. 『記・紀』にみる禁断の恋
2. 間人の思い
3. 皇極・斉明の思い
4. 中大兄の思い、そしてお墓



きりむら えいいちろう
桐村 英一郎

プロフィール：

1944年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、朝日新聞社入社。ロンドン駐在、大阪、東京本社経済部長、論説副主幹などを務めた。2004年末の定年を機に東京から奈良県明日香村に夫婦で移り住む。神戸大学客員教授として国際情勢・時事英語などを教える傍ら古代史を探究。2010年秋から三重県熊野市で熊野灘を眺めながら暮らしている。著書は『もうひとつの明日香』『大和の鎮魂歌』『ヤマト王権幻視行』『熊野鬼伝説』『イザナミの王国 熊野』『古代の禁じられた恋』『熊野からケルトの島へ』『祈りの原風景—熊野の無社殿神社と自然信仰』『熊野から海神の宮へ』。共著に『昭和経済六〇年』がある。

はじめに

略歴にあるように私は生まれ育ち東京、現役時代は経済を追う新聞記者でした。第二の人生は大都会を離れ、まったく違う分野に挑戦しようと、大阪経済部長時代によく通って気に入った奈良盆地の南に借家をして、古代史の勉強を始めました。そこで新聞や雑誌への連載を何冊か上梓しましたが、「熊野から大和、伊勢へ」ヤマト王権の創始者たちの心の旅路を追う空想を交えた物語の取材で熊野に通ううち、その魅力にはま

りました。熊野灘を眺めながらの暮らしも8年になります。

最初に申し上げておきますが、私は「建皇子は中大兄（なかのおおえ）皇子（後の天智天皇）と間人（はしひと）皇女（孝徳天皇皇后）との間に生まれた、つまり母親（皇極・斉明天皇）が同じ兄と妹の子だった」と考えています。近親相姦、それも性に比較のおおらかだった古代でさえタブーだった「同母の子同士」の恋の結晶というわけです。奈良県在住時代からの友人である松田度さんに「教育を旨とするイベントにそんな説でも

いいのか」と聞いたところ、「いろいろな考えをぶつけ合いたい」との返事だったので、パネラーをお引き受けした次第です。

1. 『記・紀』にみる禁断の恋

私がなぜ古代の性のタブーに興味をもったのか。それは決して長くない『古事記』の中に許されぬ恋物語が二つも入っているからです。サホビコとサホビメ、カルノミコとカルノオオイラツメですね。この二組の男女は「父母が同じ兄と妹」「大王（天皇）の妻とその兄・大王の皇子と皇女」「悲劇の主人公」という共通項があります。とりわけ、垂仁天皇の皇后サホビメが、謀反を起こした兄サホビコの砦に自ら入り、烈火の中とともに死ぬ場面は、壮絶でかつ美しい、立派な文学作品です。

允恭（いんぎょう）天皇の息子だったカルノミコは妹カルノオオイラツメとの禁断の恋ゆえに追放されます。『古事記』によれば、カルノオオイラツメは兄を追って都を離れ、心中してしまうのです。

中大兄と間人は『日本書紀』が描く7世紀の実在した人物です。この二人が恋愛関係にあったことは多くの方が指摘していますが、私のように「建皇子という隠し子があった」という説はごく少数派でしょう。でもそう考えると、「なぜ斉明が建にあれほど情をそそいだのか」「なぜ祖母・母・子と一緒に葬られたか」「なぜ中大兄は母と妹を合葬して、吹っ切れたように飛鳥を離れ、近江で即位したか」などが、わかるような気がするのです。

サホビメの残したホムチワケを垂仁はわ

が子のようにかわいがりましたが、ホムチワケの父親は垂仁ではなくサホビコだったと思います。そしてホムチワケとタケルは「生まれつき言葉が不自由だった」という同じ障害を持っているのです。私はそこに注目しました。それは「ホムチワケとタケルの本当の父親、本当の母親はだれか」を示唆する『記・紀』に込められた「秘密のメッセージ」だったのではないのでしょうか。

その点では、イザナキとイザナミの神話も興味をひきます。オノゴロ島で最初に生まれた子どもが骨なしのヒルコだったからです。イザナキとイザナミは実の兄妹だったと私は思います。なぜなら中国や東南アジア、南西諸島などには「大洪水で二人だけ生き残った兄と妹が結ばれ、その部族や人類の始祖となった」という神話や伝承がたくさんあるからです。こうした神話や伝承で、最初の子は異形でした。イザナキ・イザナミ神話の原型は南方から伝えられ、それが皇祖神アマテラスにつながる神話に作り替えられました。「大洪水」「兄妹」はごまかしても「ヒルコ」は消しきれなかったのです。いや『古事記』の編者が「国生み神話のルーツ」を後世に伝えるため、わざと残したのかもしれない。

以下、建皇子の生と死を巡る3人の「思い」とお墓の探究を、私の想像で述べます。

2. 間人の思い

蘇我入鹿暗殺という事件で、思いがけず皇位についた軽皇子（孝徳天皇）は間人皇女の叔父でした。間人との結婚は、皇族とはいえ天皇の子ではない孝徳に「ハク」をつける

意味もあったのでしょうか。孝徳50歳、間人17歳の「年の差カップル」でした。

兄、中大兄との関係は孝徳の皇后になる前から、そしてその後も続いていたと思います。間人にとって嫌々の結婚でしたが、周りに説得されました。兄にとっては年の差が「安心要因」だったかもしれません。

朝廷が「大化の改新」に大わらわのさなか、問題が起きました。中大兄の子を宿した間人がひそかに出産したのです。孝徳は妻の妊娠に気付かなかったのか、ですか。親子ほども違う二人は公私とも一緒の時は少なかったでしょう。お腹がふっくらしてきたとき、間人は思い切って母、皇極上皇に全てを打ち明けました。子どもたち関係を知っていた皇極は「病氣」と称して娘を預かり、自宅に「隔離」したのです。白雉2年(651年)の春、間人は男の子を出産、彼は建と名付けられました。

出産前、皇極上皇は生まれる子の「母親探し」に動きまわりました。頼んだのは中大兄の妃のひとりである遠智娘(おちのいらつめ)、冤罪で自決した蘇我倉石川麻呂の娘です。苦労人の彼女は義母から頭を下げられ、引き受けました。こうして「建皇子は中大兄と遠智娘の子」として『日本書紀』本文に書かれたのです。

『日本書紀』は中大兄の妃、蘇我造媛(そがのみやつこひめ)が「父、石川麻呂の死に心を傷つけられ死に至った」と語っています。蘇我造媛と遠智娘を同一人物とする説がありますが、そうなると「建皇子は母親が死んでから生まれた」となって、つじつまが合わなくなりますし、遠智娘を建の母親に仕立てることもできません。二人は別人で姉妹がそろって後宮に入ったと解釈します。

建皇子を産んだとき、間人は23歳ぐらいでした。そして「病気が治った」として孝徳天皇のもとに帰ったのです。それから2年ほどして難波宮で「中大兄が皇極上皇、間人皇后、大海人皇子(後の天武)らを引き連れ、飛鳥古京に戻る」という大事件が勃発します。

「大切に飼っていた馬を、他人が見知るようになり、連れ去った」という孝徳の歌には、置き去りにされた妻への恨みが込められています。「見る」という言葉は男女関係の親密さを表わすことがあるので、二人の関係に気付いていたでしょうが、「妊娠・出産」までは知らなかったと思います。

悲憤と寂寥のなかで孝徳の死んだ後、皇極上皇が斉明天皇として再び即位します。入鹿暗殺の時も、このときも中大兄は天皇になりませんでした。「知る人ぞ知る」間人との関係がそれを阻んだ理由の一つだと思います。

間人は飛鳥に戻り、665年2月25日に37歳ぐらいでこの世を去るまで、比較的心穏やかに過ごしたのではないのでしょうか。言葉がしゃべれない「わが子」の顔をこっそり見に行くこともあったと思います。もちろん、斉明天皇4年(658年)5月、建皇子がわずか8歳でこの世を去ったときは、一人泣きぬれました。道ならぬ恋、気が進まない結婚、母親と名乗れない苦悩、そして息子の死……。間人は運命と性(さが)に翻弄された女性でした。

3. 皇極・斉明の思い

入鹿暗殺(645年6月)の後、皇位を弟

の軽皇子（孝徳）に譲った皇極女帝は、子どもたちのただならぬ関係を早くから気付いていましたが、「妊娠」は驚きだったでしょう。でもすぐ娘を自邸に匿い、赤子の母役を遠智娘に頼んだ手際はさすがでした。

皇極上皇にとって、母親に抱かれることのない建皇子は「ふびんな孫」でした。そのうえ、本当の母を知らない孫は、口がきけないまま8歳でこの世を去ったのです。孝徳天皇の死後、斉明天皇として再び皇位についた女帝は、孫が今城谷（いまきのたに）に埋葬されたとき「悲しみに耐えられず、慟哭された」と『日本書紀』は記しています。

私が「この子は普通の孫ではない」と思ったのは、斉明が建皇子を悼んだ歌を6首も詠んでいることです。3首は死に際して、3首は有間皇子の事件が起きた紀温湯（きのゆ）への旅の途中でした。私は「飛鳥川 漲（みなぎら）ひつつ 行く水の 間（あひだ）も無くも 思ほゆるかも（飛鳥川が水をみなぎらせて、絶え間なく流れてゆくように、絶えることなく、死んだあの子のことが思い出されることよ）」の歌が好きです。

孫は何人もいたでしょうに、建への思い入れは尋常ではない。「私が死んだら、この子を必ず合葬するように」と命じたことも含め、二重三重のふびんさが斉明の心を重くしたのでしょう。

661年7月24日、斉明は68歳で亡くなります。新羅に攻められた百済を救援する船団を率い、九州まで出向いた旅先でした。なきがらは飛鳥に運ばれ、殯（もがり）の後に埋葬されます。私は何度か改葬されたと考えていますが、そのことは後に述べます。

4. 中大兄の思い、そしてお墓

中大兄は626年に生まれ、671年12月3日に亡くなっています。妹との恋に燃え、悩んだ日々は、激動の時代でもありました。蘇我入鹿暗殺・大化の改新・蘇我倉山田石川麻呂の自害・有間皇子の変、白村江の戦い（倭国の派遣水軍が唐・新羅連合軍に大敗）という国の命運を左右する事件が相次いだためです。

夫を難波宮に置き去りにして自分についてきた間人は、母斉明の死から3年半後、その後を追うように旅立ちます。いつ大唐が攻めてくるかもしれないという緊迫した情勢の中で、母に続いて愛する妹を失ったのです。「冷たい権力者」に映る中大兄も人の子でした。彼の感情は、斉明、間人、建の3人のお墓に表れていると私は思います。

『日本書紀』の667年2月27日条には「斉明天皇と孝徳皇后（間人）を小市岡上陵（おちのおかのうえのみささぎ）に合葬した」と記されています。斉明天皇のお墓の候補として研究者が挙げているのは、明日香村の牽牛子塚（けんごしづか）古墳、岩屋山古墳、橿原市鳥屋町の小谷古墳などです。近鉄・飛鳥駅の裏手の岩屋山古墳は、明治政府のお雇い外国人で、あちこちの古墳の記録を残した冶金技師ウィリアム・ガウランドが「舌を巻くほど見事な仕上げと、石を完璧に組み合わせてある点で、日本中の古墳のどれひとつとしてここに及ばない」と絶賛した横穴式古墳です。一方、アサガオの漢名「けんごし」の名を持つ牽牛子塚古墳は巨大な凝灰岩をくり抜いて左右二つの石室がつけられており、2010年の発掘調査の

結果、「斉明陵に間違いない」といわれました。果たして小市岡上陵は、どちらの古墳なのでしょう。

私は、小市岡上陵は岩屋山古墳のことで、斉明と間人はまずそこに葬られた後、牽牛子塚古墳に改葬された、と考えています。つまり両方とも斉明と間人のためにつくられたお墓なのです。ただ中大兄が斉明、間人そして「ふびんな子」建のためにつくったのは岩屋山古墳でした。

斉明は本葬前の殯の後、いったんは別の場所に埋葬されました。間人が亡くなったのは白村江の敗戦の1年半後です。大混乱から一息ついたところで、中大兄は愛する妹と母親のために岩屋山古墳をつくり、母と一緒に眠っていた建皇子もそこに改葬しました。

牽牛子塚古墳は石室がふたつあります。それぞれ斉明と間人を葬ったとされていますが、中大兄が母と妹を別々にするのでしょうか。彼の気持ちを汲めば、母と妹、そしてわが子の霊を一緒に祀るほうが納得できません。

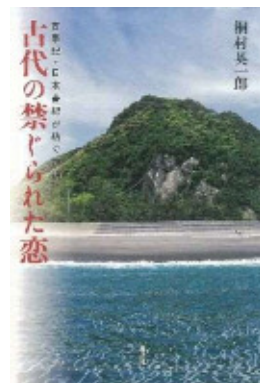
「隠し子」で心配をかけ、本来自分がなるべき皇位に再度、就いてもらった母。「年の差婚」をのませ、わが子をそう呼べない悲しい思いをさせた妹、そして本当の母を知らず、無言のうちに世を去ったかわいそうな子。三人を同じ墓に納めた中大兄は、気持ちが「吹っ切れた」のでしょうか。飛鳥を離れ、都を近江に移します。そして翌年の668年1月に38代の天智天皇として即位するのです。斉明はようやく、娘と孫をその手に抱くことができました。母子はあの世で本当の心の平穏を得たことなのでしょう。

中大兄皇子が岩屋山古墳をつくったとす

ると、牽牛子塚古墳はだれが築いたのでしょうか。この古墳の石室の石は80トンもあるそうです。築造に述べ2万人が従事した(明日香村教育委員会の試算)大工事を、国防の備えに追われている当時の朝廷につくる余裕はなかったと思います。斉明自身も生前から「私の墓には民の労力を動員せず、質素にしてほしい」と息子に言っていたのです。

牽牛子塚古墳は、文武天皇(持統天皇の孫)の時代に築造され、岩屋山古墳から改葬された。私はそんな説に賛同します。『続日本紀』の文武天皇3年(699年)10月20日の条に「官人や大工を斉明陵や天智陵に派遣し修造させた」というくだりがあります。牽牛子塚はこのときつくられたのではないのでしょうか。

持統は中大兄の子ですから、その孫の文武からすれば斉明や間人は過去の遠い人物です。それに造営のとき文武はまだ17歳ぐらいでした。実際に陵墓造営を命じたのは太上天皇として実権を握っていた持統だったと思います。亡き父天智の思いを汲んで、祖母(斉明)と叔母(間人)の鎮魂をしたかったのでしょうか。でもふたりが二つの石室に別れ別れになるのを喜んだかどうか。小さくても建皇子を含め3人一緒の方がよかったんじゃないかな。そんな気がします。



『古代の禁じられた恋』
は大淀町立図書館で読むことができます。ぜひ手にとってみて下さい。

関連年表 桐村英一郎 作成

舒明													推古				紀年			
13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	元	36	35	34	～	4	3	2	西暦
641	640	639	638	637	636	635	634	633	632	631	630	629	628	627	626	～	596	595	594	西暦
															生誕					皇極・斉明 生誕
											生誕？									天智
												生誕？								天武
																				間人
																				建
																生誕				孝徳
		生誕																		有間
																				大田
																				大津
																				大伯
																				持統
																				草壁

天智			斉明					白雉				大化				皇極						
3	2	元	7	6	5	4	3	2	元	5	4	3	2	元	3	2	元					
664	663	662	661	660	659	658	657	656	655	654	653	652	651	650	649	648	647	646	645	644	643	642
			死去 7.24 (称制)						即位 6.2									退位 6.14				即位 6.2
	白村江敗退														石川麻呂死				乙巳の変 6.12			
																					立后 10	
						死去 7							生誕									
										死去 10.10	間人 去る								即位 6.14			
						死去 11.1																
																					生誕？	
	生誕																					
			生誕 1.8																			
																						生誕
		生誕																				



泉徳寺境内・仁王門前にある齊明天皇の歌碑（大淀町今木）

いまきなる おむれがうえに くもだにも
しるくしたたば なにかなげかむ

建皇子の「^あ唾」をめぐって

はじめに

1. 私の研究歴
2. 『建王論』のこと
3. 建の「唾」について
4. 建の生涯を追う
5. 日本書紀の意図

おわりに



まつのぶ しゅういち
松延 秀一

プロフィール：

1955年、香川県高松市生まれ。京都大学文学部史学科現代史学専攻卒業。同大学院を経て、1984年より大阪外国語大学附属図書館、1995年より京都大学図書系職員として勤務、2016年3月に定年退職。引き続き、再雇用職員として同附属図書館勤務。

幼時より聴覚障害を有する。そのため障害者、とりわけ聴覚言語障害者の歴史に関心を持つ。同様の関心を持つ仲間が集まって「近畿聾史研究グループ」が組織されていたことを知り、その一員となる。ただし研究対象としては日本の近現代が中心。前近代については盲人史に比べ史料が皆無に近い状況であり、建王の記載は珍しい事例。あえて考察して『建王論』を自費出版した。当方としては「夜店」(丸山真男)のつもりであった。これが松田度氏に注目され、このパネルディスカッションに参加することとなった。

はじめに

生まれながらにして物を言うことができなかつた、つまり「啞」だったと伝えられる建皇子（建王）について、関心のある方が結構おられるようです。ここ大淀町に伝承があり、今回の事業名は「ボイス・オブ・タケル」とのこと、建皇子の「声なき声」を聴こうということでしょうか。「声」や「ボイス」には音声だけでなく、比喩的な意味もありますから。障害者差別解消法の施行や各地での手話言語条例の制定といった背景があるのですが、それよりも、里中漫画の影響力の大きさの故でしょうか。当方は図書館勤務ですが、漫画界の状況には疎く、まことに失礼ながら、「天上の虹」に建皇子の章があるというのも最近になって知ったことでした。

この影響によるものか、「建皇子」でネット検索すると、多くのブログがヒットします。皆、思い思いに自由に書いていらっしゃるようです。アカデミズム史学出身の当方としては、自由な想像力のはばたきにはついていけないなあとため息をつくことしばしばであります。

さて、世間では耳の不自由な人の数が多くなっています。人口比率にして 10% になるとの調査もあります。新聞広告でも補聴器の広告を見かけるようになってきました。その対象者の多くは成人後失聴者です。つまり加齢性難聴者の増加を反映しています。高齢化社会の表れでしょう。一方で、子供の頃からの聴覚障害は多くない。こちらのほうは、少子化の反映でありましょう。

ところで、当方も聴覚障害者です。子供の頃から聞こえにくい状態で、補聴器をはずすと全く聞こえませんが、物を言うことはできます。手話も少々わかります。ここでちょっと脇へそれると、「障害」の表記については「障がい」とするところもありますが、当事者でもある当方は本稿では「障害」と表記します。「障害」とするのが適切かもしれませんが、常用漢字にはないらしいですね。本筋に戻って、聴覚障害といっても、聞えの状況や聞えなくなった年齢により、多様な状態が生じているわけです。

そういうわけで、当方は、本稿で話題とする「啞」には該当いたしません。言うまでもないことですが、「啞」は「あ」と読み、物が言えない状態を指します。

1. 私の研究歴

ところで当方の専門分野は現代史学専攻であり、とりわけ近現代日本史でした。現代史学専攻というのは、京都大学にしかありません。通常は、日本史・東洋史・西洋史の三分、これに考古学、というところでしょう。京大の場合、これらに加えて、西南アジア史と地理学が加わります。それはさておき、大正時代に原敬という首相がいたことはご存じでしょう。あのころの時代、すなわち大正デモクラシー期の政治・外交史料を読んでおりました。

その後、図書館就職で中断し、研究履歴の空白がありましたが、日本聾史学会や近畿聾史研究グループといった、聴覚障害を持ちながらも聾史に関心を持つ同障者仲間がいることがわかり、そうしたグ

ループに加わって、当方の研究対象が上から下へ移行しました。政治外交といった国家権力中枢から、障害者民衆へ、というわけです。もっとも、今回の建皇子の場合は、古代国家の権力中枢に近い部分を扱ったことになりました。聴覚障害者の歴史という観点から、この皇子についての伝記的事実を探ってきました。現代史専攻出身者が古代史を手掛けた所以です。

ただ、「聴覚障害者史」と表記すると煩雑になるので、以下「聾史」とします。「聾」は「ろう」と読み、全く聞こえない状態を指しますが、ここでは「聾」で聴覚障害を代表させることにいたします。

歴史上、聾者として伝わっている人物は、成人後の失聴者が多いのです。谷三山、宇都宮黙霖、青木木米、などです。今回の建皇子のように、幼少からの障害を持った人が歴史書に書き残されるというのは珍しいことです。

2. 『建王論』のこと

ここから本題に入ります。建皇子が「唾」であったということですね。

ここから先は、当方が 2010 年に自費出版した『建王論』という古証文を引っ張り出して、簡略に申し述べることにしましょう。松田さんの原稿と重複する部分が多くなるかと存じます。ただこの出版物は、古代史学界に向けたのではなく、聾史界向けに出したもので、部数も 100 部、8 年前のもので在庫も僅少です。

ですので、本稿において、その要旨を述べることで、建皇子について私見を開陳することになります。

ただし先程も申し述べましたように、当方の本来の専門は近現代でして、古代史や考古学にも大いに興味はありますが、言葉は悪いけれども趣味、と言いますか、丸山真男という政治思想史学者の言葉を借用すれば「夜店」のつもりでございました。それがここで注目される次第となったわけでありまして。松田さんはさすがに考古学者、おそらくはネットにただよっていたほんのひとかけらから突き止められたこととなりますね。もっとも『建王論』は国立国会図書館や京大の図書館等に寄贈していますので、ネットの蔵書検索でヒットいたします。

それともう一つ、宣伝になりますが、さきほど触れた近畿聾史研究グループではフェイスブックを開設していて更新もしておりますので、ネット環境にあって御用とお急ぎでない方はご笑覧くだされば幸いです。グループの活動状況がわかります。

ところで「建王」と「建皇子」の表記ですが、そもそも天皇号の始まりは天武朝からという説が有力です。つまり、「皇」の文字が使われるのは、それ以降ということになり、建の時期はまだ「皇」の文字は使われていないであろうということで、それに従い、自費出版では「王」としました。ただ今日のイベントでは、「皇子」と表記して「皇」の文字を使っていますね。本稿では以後単に建のみとします。

建に関する研究文献は、ないわけではありません。ですが、多くは当該研究者が抱いている研究目標の中の一環として、建にまつわる問題を検討している、というのが多いでしょう。本稿で引用を明示

する出典名を見ればお分かりになるかと存じます。前述の当方の自費出版は、そうした、あちこちに散らばる先学の諸業績のうち、建に関する部分を集約したものと称して差支えありません。要するに、そのものずばりの書名に示したように、建という人物を真正面から対象として、伝記的事実を確定させようとしたものです。

3. 建の「啞」について

ではまず、題目にも出した建の「啞」について申し述べることにいたしましょう。これについて書紀は、啞であって話すことができなかつた、と記すのみで、原因については触れておらず不明です。つまり聴覚障害による啞かどうか、明記がないため断定しがたいわけです。

ほかに、聞こえていても種々の機能損傷等で話せない、例えば発声器官に何らかの不具合があるためなどという障害があったりしますので、そういう可能性も考慮することになるのでしょうか。あるいは、発達障害と言いますか、脳機能の損傷のゆえに話せないのでは、という想定もあります。山本正志氏は『ことばに障害がある人の歴史をさぐる』(文理閣・2005年)の中でそうした可能性を指摘しています。ただし建にあてはまるかどうかわかりません。

もともと、聴覚障害者である当方としては、聞こえないまま成長したから物が言えないと考えたくなりますが、そうすると意思疎通手段はどうしていたのか、という疑問が出てきます。とはいえ、これについても手がかりはありません。聞こ

えていなかったとしたら、身振り手振り、ジェスチャーで意思表示していたかもしれません。

ただ後で触れる斉明の歌六首を見ると、斉明は孫の建を相当かわいがっていたようですし、建にも祖母の愛情は伝わっていたでしょう。それをうかがわせる文言が、建の死を伝える文章にあります。それが「有順」「器重」です。岩波文庫の註釈によると、前者は「みさおか」、後者は「ことにあがめる」と読むようですが、わかりにくいですね。「みさおか」とは節度があつて美しい意味とのことだそうです。上品だったとも読めます。

なお、「順」の一字に注目するなら、したがう、とか、すなお、とかの字義があります。祖母の言いつけをよく守り、と言うか、もし聞こえなかつたとすれば、身振り手振り、見よう見まねで祖母の意図するところに従って皇族の一員として成長していったのでしょうか。

「あがめる」のほうは文字通りだと、「うつわ」を「おもんじる」ことになります。これについて国文学者の内田賢徳氏は『萬葉の知』(塙書房・1992年)のなかで、「斉明が建王の徳質を見て重用したという意味である。(中略)資質を期待して重んじたということ」(344ページ)という解釈を示しています。もしそうとすれば、脳機能障害のようなことはなかつたものと察せられるでしょう。

4. 建の生涯を追う

この後は伝記的事実について申し述べていきます。

母について

母についてですが、『日本書紀』本文記載どおり、遠智媛説でよろしいでしょう。なかには、「或本」の記載に不審点があるとかで、西暦にして 649 年の造媛死亡記事とも合わせて、名前の類似から遠智媛と造媛とは同一人物だとする説もありますが、ちょっと無理があると思います。書紀の編者の立場としては、「或本」で異説を紹介はするが、本文を優先して読んでほしいということでしょう。

この点、笹川尚紀氏が『日本書紀成立史攷』（塙書房・2016 年）の中で、建およびその関係者にかかわる史料を逐一検討したすえ、「本文に掲げた系譜がもっとも穏当であると思われる。（中略）日本書紀の編者はよせあつめた史料を吟味して、正しい可能性のより高いものを本文にとりあげた」（151 ページ）としております。実際に、別人説もあります。笹川氏がどちらを支持しているのかよくわかりませんが、当方としては別人説のほうが合理的だろうと思われまます。ですので、建の出生年は 651 年ということになります。

母親と出生年がわかれば、次は成長過程ということになりますが、皆様ご承知の通り、何も記載がありません。手がかりはさきほど触れた斉明女帝の歌六首が出てくる部分であり、これについてはあとで申し述べます。記載がありませんので、記録史料がない事項については沈黙しなければなりません。実証史学の宿命です。

墓について

墓についてですが、これはみなさんの最も関心ある項目かと存じます。ここ大

淀町に建の殯塚の伝承があるからですね。ただあくまでも殯の塚であって、最終埋葬地ではありません。

墓については、斉明女帝の詔が記載されていて、合葬せよとあります。ですから、合葬されたとみるのが穏当ですが、合葬否定説もあります。建を埋葬したと明記する記事がないからだそうですが、合葬せよとの詔が存在する以上、子にあたる中大兄は、母斉明のいわば遺言に従って合葬したとみてよいでしょう。そこで、建の墓探しは、祖母斉明の墓探しと同じことになります。

つい 7・8 年前でしたか、牽牛子塚古墳の発掘が行われ、その成果は大きく報じられました。皆さんもご記憶のことと存じます。八角墳であることが確認されました。さらに続報として、越御門塚古墳と名付けられる埋葬施設がすぐ横から発掘されました。これは大田の墓であろうということになりました。ですので、斉明の墓は牽牛子塚古墳でほぼ確定的であろうとのことでした。

かつて、前述した内田賢徳氏は『萬葉の知』（前掲）のなかで「その陵が、建王—斉明—間人—大田の順に葬られた地である可能性はある」（345 ページ）と述べていましたが、はからずも裏付けられたと言っているでしょう。

さて、殯の場所についてです。「今城谷」で行ったというのですが、それはどこでしょうか。これを「今城」と「谷」とに分けて、今城を地名とし、ここ大淀町の今木に当てる説が多いようです。

今木説は 1736 年成立の『大和志』に見えます。この書物が法具良塚説を最初に

唱えたのでした。ですが、その根拠は不明です。なぜそこに比定したのかの説明がないのです。比定するには、斉明朝以降『大和志』までの間、何らかの伝承が語り継がれてそれを根拠としたのであろうということになります。民俗学的な探索が必要でしょう。それと、今木地域のどこかに未探索の土蔵があってそこに未解読の古文書が眠っていないかどうか。

で、殯塚についての私見は飛鳥地域のどこかであろうというものです。殯というのは、現代で言えば、葬儀とかお通夜とか、そういうものです。現代でも、お通夜は自宅ないしは葬儀社の用意した近い場所で行うでしょう。それを考えれば、大淀町今木というのは、都があり日常的な生活の場でもあった飛鳥からは遠いです。短時間で弔問できる所ではないでしょう。

殯の場所についての最近の見解として、西本昌弘氏が『飛鳥・藤原と古代王権』（同成社・2014年）の中で、酒船石遺跡近辺に「イマキ」という地名があることを指摘し、ここではないか、としました。その遺跡は、亀形石造物が露出していて、みなさんも飛鳥巡りで御覧になったことでしょう。子供が見たら面白がって遊ぶかもしれません。そういう場所（庭園説が有力のようです）の近くに8歳で死んだ子供の通夜が行われた、というのはごく自然なことでしょう。これは支持しうる見解と考えます。大淀町の皆さんには申し訳ありませんが。

歌について

それでは次に斉明が残した歌六首につ

いて述べておきましょう。これについては、国文学のほうで研究が多く蓄積されています。「建王悲傷歌群」と称され、上代文学史でも注目される歌だそうです。研究者としては、居駒永幸氏が代表的です（『古代の歌と叙事文芸史』笠間書院・2003年）。歌については代作の可能性も指摘されていますが、たとえ代作であったとしても、斉明の建に対する愛情が表現されている限り、実作同様に扱っても差支えはないでしょう。

そこで国文学者たちの研究成果を参照してみると、斉明と建との濃密な愛情の交流があったことを示す、ということですね。もしかすると、祖母の眼から見て良い孫であったけれども、話せない、というコミュニケーション不全を不愠に思ったのかもしれない。たとえ話せなくても、「有順」「器重」と評されたように何らかの感情伝達は大きいにあったことでしょう。

以上で、建についての伝記的事実となる事項を申し述べました。わずか8年の生涯でしたから、例えば吉川弘文館の人物叢書やミネルヴァ日本評伝選というようなシリーズに入るほどの分量にはなりません。山川出版社の日本史リブレット「人」シリーズくらいの薄いページ数でも多すぎるでしょう。

5. 『日本書紀』の意図

では次に、『日本書紀』が建について書き残した意図を推測してみます。とは言え、状況証拠から勘案するので、あまり根拠のある話にはなりません。

皆さん御承知のように『日本書紀』の編纂を発案したのは天武でしょうが、ずいぶん時間がかかり、編纂が本格化したのはもっと後で、やっと 720 年に完成しました。これを読むのはだれかといえば、当時の国家権力の構成者、すなわち貴族官人層です。

さて、皇族に障害者がいた、などということは、『日本書紀』という書物の性格からすれば、本来書き残したくないことでしょう。ほかには、垂仁紀のホムツワケという、これも物が言えなかったという、実在したかどうか定かでない人物の伝承があるくらいのものです。

それでもあえて書き記した。斉明の歌六首が伝えられていたからだ、というのが理由の一つでしょう。唾であっても天智の嫡男であり、斉明からすれば皇孫でもあったからだというわけです。これは国文学の方面からの理由づけです。

それともう一つ、当方が推測するに、天武後継の正当化、ということがあるのではないのでしょうか。

天武は、壬申の乱で天智の子の大友を倒して皇位に就いたわけですから、篡奪ということにならないよう、天智の子には皇位継承可能な人物はいなかったということにしたいため、唾にして夭折した建のことを書き記した、とも言えるわけです。大友については、母親の身分が低かったため、皇位継承の資格はなかったと言いたかったようです。

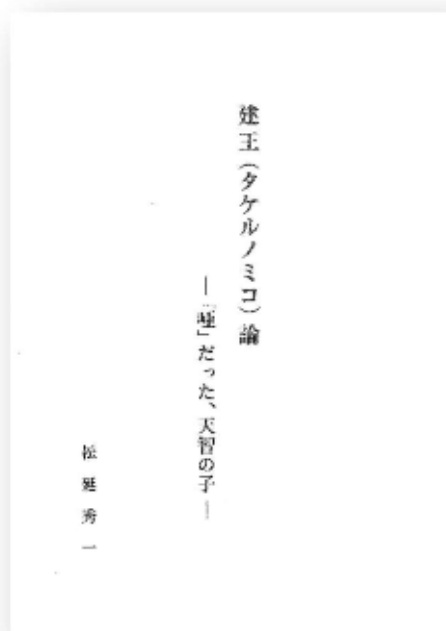
あくまでもこちらの推測にすぎませんので読み流して結構です。

おわりに

最後になりますが、『日本書紀』編者の意図がどうであれ、建の存在が書き残されたことによって、現在の私たちは、当時の皇族にも障害者がいたことを知ることになります。そういう事実こそを「語り継ぐ」ことには大いなる意味があるかと思存じます。

本稿の題目では「唾」を強調しましたがけれども、中身は建の伝記的事実の追究といった態のものになりました。本稿を御覧になった皆様方が今回の行事を契機にして、特に、視覚や肢体不自由と異なって外見上は見分けられない聴覚と言語の障害者の存在に気づくようになることをお願いして終えることといたします。

拙い長文を御高覧いただき、ありがとうございました。



『建王論』は大淀町立図書館でも読めますので手にとっていただければ幸いです。



タケルくん (イラスト : MW)

タケルの声は聞こえるか

はじめに

1. タケル皇子の生涯
2. タケル皇子の物語
3. タケル皇子は今どこに

おわりに

プロフィール：

1974年大阪市生まれ。同志社大学大学院終了後、同大学歴史資料館研究員を経て2005年より大淀町教育委員会に勤務、現在同文化振興課・主任技師。二児の父で、趣味は家庭菜園とウォーキング。



大淀町教育委員会

まつだ わたる
松田 度

はじめに —琥珀色の挽歌—

ぼくが保久良古墳にであったのは、今から12年前、2006年2月の寒空の下でした。古墳の前にたち、石室の奥に見える光に誘われて、羨道から奥の部屋へと腹ばいになって進み、写真をとりました。その時の印象は、これは6世紀くらいの横穴式石室墳かな、というものでした。

しかし、この古墳には、後述のように、7世紀半ば頃に世を去った建皇子（以下、タケル皇子）の殯塚（もがりづか）という伝承があり、それが信じられていました。この漠然とした地域伝承のなかで、この古墳も正しく評価してゆかねば、という決意をもった事を記憶しています。

数年後、その時がやってきました。初めて

の発掘調査が、保久良古墳の謎の一つを解決しました。墳丘にほどこされた列石が目の前にあらわれ、石室内から石棺材の破片や鉄製品、そしてたったひとつ、琥珀（こはく）玉のペンダントがみつかりました。その後、古墳の精密な測量調査の図が作成され、7世紀前半ごろの特徴をもつ横穴式石室墳として、すこしずつですが、この古墳の評価もかたまりつつあります。

2012年7月には、大淀町へ古墳を含む土地が寄贈され、大淀町指定の史跡となって、今にいたっています。

琥珀玉の色は美しく、風化の痕跡もみられません。琥珀といえば、日本では岩手県の久慈というところでとれるものが有名ですが、これもそうなのか、どうか。意外に、輸入品の可能性も考えさせられます。そのか

たちは、一般的な6・7世紀代の古墳からみつかるとは異なっており、むしろ飛鳥や韓半島の百済の古代寺院の鎮壇具などに類例をもとめられるようです。どうしてこんな琥珀玉がこの古墳からでてくるのか、さらに謎は深まりました。

そして、まだ私の中で解決できていないのが、タケル皇子の殯塚という伝承です。そこで、このタケル皇子という人物にまつわる語りごとや歌物語に視点をすえて、伝承の一端を読み解いてゆきたいと思います。

1. タケル皇子の生涯 —ところで、タケル皇子って?—

タケルとは

「タケル(建・健・武)」は、『古事記』『日本書紀』(以下、記紀)の世界では「勇者」をあらわす尊称です。ヤマトタケル、イズモタケル、クマソタケルなど、記紀には地名を冠した多くのタケルたちの物語が記されています。しかし、今回紹介する「タケル皇子」は、誰が名付けたのかはわかりませんが、地名を冠さない、シンプルでストレートな名前といえます。これは、タケル皇子自身の「幼名」とも考えられますが、後述のように、「健部(タケルベ)」という出雲の地にゆかりのある名です。

『日本書紀』に残された記録

タケル皇子(タケル王)は、天智天皇(626 - 672)と越智娘(蘇我造娘・美養津子娘)の皇子、皇極(斉明)天皇(594 - 661)の皇孫として、大化5(649)年に誕生したと考えられます。この年の3月25日には、政変によって右大臣であった大化の改新

(645)の立役者・蘇我倉山田石川麻呂が自殺(殺害)。これをうけて、天智にとついでその次女の遠智娘も、心に傷を負い死去(病死)しました(孝徳紀・大化5年条)。

この大化5年の政変を主導したのは、やはり当時政権を牛耳っていた中大兄皇子(のちの天智天皇)とみられ、父の政略により、タケル皇子は生まれて間もなく、祖父・母を失ったということになります。

タケル皇子は、中大兄皇子と遠智娘の長子として、将来皇位を継ぐ重要な立場にありました。実姉(長女)の大田皇女と次女・鵜野皇女(のちの持統天皇)は、それぞれ6歳、5歳年上で、母親亡き後は、後述の『日本書紀』の記述からも、斉明女帝みずからが、彼らの養育にあたったと考えられます。

またタケル皇子は生まれつき声が出せず、8歳で亡くなったと伝えています。建皇子を愛した女帝はその晩年、建皇子を失った悲しみを歌にし、自らの墓に彼を合葬するようにと言い残しました(斉明紀4年条)。そして、本埋葬に先立ち、そのなきがらを置いた「殯(もがりの場)」が「今城谷上」に起こされたと伝えます(同4年条)。

その後、斉明天皇の陵墓は「小市(越智)」に造られました(同6年条)。それから文武3年(699)にも「修造」の記載があります。

現在、宮内庁が治定する斉明天皇陵、「越智崗上陵」(高市郡高取町車木)の表札には「斉明天皇 孝徳天皇皇后 間人皇女 越智崗上陵 天智天皇皇子 建皇子墓」と記されています。

また、近年の調査成果により、牽牛子塚古墳(明日香村越)が、斉明天皇墓である可能性も高まっていますが、建皇子がそこへ合葬されたかどうかは、明確な記録がなく不

明といわざるをえません（私見は後述）。

生年・没年と埋葬地

断片的な記録からタケル皇子の生年は、大化5（649）年3月末（もしくは4月）の、母遠智娘の病死以前、と考えられます。これにたいして没年は、斉明4（658）年5月条に殯（モガリ）が起こされたと記しています。その場合は年齢が9歳になるので、誕生月以前の斉明3年もしくは4年の初冬に死去後、数月おいて起殯されたと考えれば、矛盾なく理解できるのではないのでしょうか。

ところで、モガリの後、タケル皇子の本埋葬が行われたかどうか明確でない、というのが従来の説ですが、斉明天皇と間人皇后を埋葬した、天智6（667）年の2月27日条「是日。以皇孫大田皇女葬陵前之墓。」の一文が見過ごせません。

「皇孫」の表現は、「天皇の位を継ぐ皇子に与えられた称号」とみられますので、この一文は「この日、皇孫（建皇子）と大田皇女を（斉明天皇・間人皇后の）陵の前の墓に葬る」と読むことができます。つまり、建皇子のなきがらは、斉明4年5月に「今城」の地で起殯された後、天智6年2月に斉明天皇の遺言をうけて、その陵の前に葬られた可能性が考えられます。

2. タケル皇子の物語 —記紀に伝わる断片を拾う—

斉明天皇の歌

『日本書紀』には、斉明天皇が、タケル皇子のことを偲んでつくった挽歌（死を悲しみ悼む歌）が6首、伝えられています。



▲関連地図

【五月】

今城なる 小丘（おむれ）が上に 雲だにも
著くし立たば 何か嘆かむ（其の一）

射ゆ鹿猪（しし）を つなぐ川上の 若草の
わかくありきと 吾が思はなくに（其の二）

飛鳥川 漲（みなぎら）ひつつ ゆく水の
あいだもなくも 思ほゆるかも（其の三）

【十月】

山こえて 海わたるとも おもしろき 今城
のうちは 忘らゆまじに（しじ）（其の一）

みなとの 潮のくんだり 海くんだり うしろも
くれに 置きてかゆかむ（其の二）

愛しき 吾がわかき子を 置きてかゆかむ
（其の三）

女帝につき従った従者であり、知識人・秦大蔵造万里による代作説もあるなかで、この6首は、斉明女帝自らが個人的な悼みを詠んだ名歌と評価する、故 塚本澄子さんの力強い説があります。ここに、タケル皇子にまつわる「断片」を拾うことができます。

五月歌と十月歌（其の一）の「今城」は、いうまでもなくタケル皇子の殯が起こされた場所です。この場所をめぐる論争があります（後述）。前者には、殯が起こされた丘のうえに、タケル皇子の面影（雲）が立ち渡ってほしいという、女帝の悲痛な思いがうかがえます。

五月歌（其の二）は、塚本さんの指摘どおり、わかくを「若弱く（よわよわしく）」と理解すれば、女帝でさえも気づかなかった



▲たぎつ飛鳥川（旧暦5月）

タケル皇子の「わかさ（よわさ）」が、語られていることになります。

其の三は、飛鳥の宮殿から遠くない、飛鳥川の絶え間ない激しい流れに、胸中の「涙河」を重ねあわせたものといえます。

これにたいして十月歌は、女帝が「紀温湯」（私見では和歌山市・紀ノ川河口部と推定）へ行幸した際、秦大蔵造万里に、勅命として「後世への伝承」を託したものです。其の二と其の三は、リフレインになっていて、皇孫を失った傷心を癒やす温泉旅行なのですが、「タケル皇子」を「今城」において、後ろ髪をひかれる思いが、より強められて、伝わってきます。

天皇自らが公の場で、個人の思いを挽歌（亡き人への思いをよみあげた歌）にしたものとして、最初の事例と評価されるこの6首は、タケル皇子の存在をなしにして語ることはできません。タケル皇子は、いわ

ば、記紀万葉の挽歌の「生みの親」なのだと
いえます。

幼皇子・ホムチワケの物語

もうひとつ、タケル皇子の伝承を考える
うえで重要な幼皇子の物語が、記紀には伝
えられています。それが、垂仁記（垂仁紀）
にみられる「ホムチ（ツ）ワケ皇子」の伝承
です。

ホムチワケは幼い頃、タケル皇子とおな
じく言語障がいをもってたとされます。
その理由について、『古事記』では、それが
「出雲大神」のたたりなので、それをのぞく
ため、「出雲大神」をまつり「神の宮」を造
らせた、という筋書きになっています。これ
らの伝承は、鳥取造（鳥取部・鳥養部・鳥甘
部）や、品遅部（誉津部）らの伝えたもので、
『古事記』では、そこに「出雲国造」が大神
の祭祀者として加わります。

このホムチワケの物語によれば、ホムチ
ワケ皇子は結局、たたりをのぞかれたため、
言葉を発することができた、という設定に
なっています。類似の伝承は、『出雲国風土
記』仁多郡三津郷にもあり、ここでは、大神
大穴持命の御子・アジスキタカヒコの言語
障がい回復した事と、律令期（8世紀）に
始まった出雲国造の朝廷での「神吉事（神賀
詞）」奏上に関連していることも記します。

ところで、タケル皇子が死去した翌年の
斉明5（659）年、女帝は、出雲国造に命じ
て「神宮を修葺」させています。よって、垂
仁記のホムチワケ皇子の伝承の背景に、こ
の斉明紀5年条の「史実」が反映されている
ことも、うかがえます。ホムチワケは、8歳
で死去したタケル皇子そのものではありません
が、物語のうえでのタケル皇子の象徴

的人物である、ということはいえます。『尾
張国風土記』逸文の丹羽郡吾縵（あずら）郷
（現・愛知県一宮市）には「品津別の皇子、
生7歳になりて語ひたまわず」云々とする
一文も伝わっていたようで参考になります。

どうやら、タケル皇子の死をきっかけに、
斉明女帝は「出雲大神」をまつりはじめた、
とみてよいのでしょうか。いわば、「出雲大神」
への祭祀は、タケル皇子とたたる大神への
鎮魂が目的だった、ということです。

「出雲大神」の伝承

このたたりの主、出雲大神とはいったい
どんな神様なのでしょう。出雲の大神と
いえば、現在の出雲大社（杵築大社）の神・
大国主（おおくにぬし）が思い浮かびます。
この神は本来の名前は「オオナムチ（オオ
ナモチ）」といい、国土を創成した「国造り
の神」と伝えます。

古事記のホムチワケ物語の舞台となっ
ているのは、出雲大社のある杵築郷など、島根
県・出雲西部の出雲郡（斐伊川流域）とみら
れます。

また、『出雲国風土記』によると、出雲郡
東部の健部郷（現出雲市斐川町付近）は、も
と「宇夜里」といいましたが、「朕が御子 倭
健命の御名を忘れじ」と勅命があり、健部を
定めたといえます。伝承ではこれを、景行天
皇の皇子・ヤマトタケルの事としていま
すが、実際は、7世紀半ばに、斉明女帝の皇
孫・タケル皇子の伝承を母体にして成立し
た可能性があります。

女帝は、斐伊川流域の地に大神をまつら
せ、一帯をタケル皇子養育のための王権の
直轄地にしようともくろんでいたのかもしれ
ません。ただしその構想も、タケル皇子と

女帝自身の死により、また、その後のあいつぐ政変と戦乱のため、意義を失ってしまったのかもしれませんが。

3. タケル皇子は今どこに —古代と現代をつなぐ—

「殯」と「本葬」をめぐる論争

先述した、「今城」がどこなのか、という論争は、現在も続いています。これを「地名」と考える人は多くいて、なかでも、「吉野郡大淀町今木」がその遺称地だとする意見は、江戸時代の享保年間開版の『大和志』以来、定説となっています。今木の保久良古墳をタケル皇子の「殯塚」とする見方も、この説によっています。

ところが、近年は「今城」を飛鳥地域に求める意見も多くなっています。

例えば、関西大学の西本昌弘さんは、この「今城」を酒船石遺跡（明日香村）のそばにある小字「イマキ」にあてています。飛鳥は、雄略即位前紀の「新（イマキ）漢槻本南丘」、欽明紀7年条の「倭国今來（イマキ）郡」、皇極紀2年条「今來の双墓」など、イマキの候補地として事欠きません。

殯を起こしたという「イマキ」がどこか、という論争は、まだまだ続きそうですが、タケル皇子の殯の伝承が残っているのは、大淀町今木の保久良古墳だけです。なお本葬地については、先述のとおり、「斉明天皇陵」の「陵前之墓」に求めるべきでしょう。

それは、牽牛子塚古墳の南東に接する越塚御門古墳なのか、それとも、別の古墳なのでしょう。

なお、宮内庁が「斉明天皇陵」として管理する車木ケンノウ古墳（高取町越智字天皇）

のケンノウは、タケル皇子の「建皇子（ケンノウ）」が訛った可能性もあります。こちらの地域伝承の成立背景にも、何か深い謎がありそうです。

「皇孫」タケルの記憶

江戸時代になって、今木の保久良古墳を「建皇子殯塚」として再発見した地元の伝承者たちは、いったいどんな記録（記憶）を根拠にしたのでしょうか。

記紀に断片として残されたタケル皇子の記憶をつなぎ合わせると、そこから見えてくるのは、若くして亡くなった皇子への鎮魂が主体となっていることがわかります。これは、記紀伝承成立の本質にもかかわってくる重要な問題なのですが、そのタケル皇子伝承の大半は、これまでの研究では日の目をみることがまれでした。

7世紀代の飛鳥時代の天皇たちは、政治的な意図によって、初葬地からの改葬がおこなわれることもしばしばで、皇子・皇女ともなれば、その埋葬の履歴が残っていないものもほとんどです。そう考えると、タケル皇子の「殯塚」という伝承も、信頼のおける史料にもとづいているわけではなさそうですが、そこには、忘れられていた皇孫・タケル皇子を顕彰しようという後世の人々の意気込みが感じられます。私はこれを安易に否定するより、例えば蘇我氏の伝承地が奈良県各地に残っているのと同じように、その伝承の民俗史的な意味を追求してゆく必要があると考えています。

幼皇子といえば、大淀町今木の地に伝承地のある「眉輪（目弱）皇子」がいます。

『日本書紀』によると、允恭天皇の子・坂合黒彦皇子は、皇位を継いだ穴穂皇子（のちの

安康天皇・黒彦皇子の弟) を殺害した眉輪(目弱)皇子(穴穂皇子に殺された大草香皇子の子)をかばって、大泊瀬皇子(黒彦皇子と穴穂皇子の弟・のちの雄略天皇)の怒りを買って、彼に味方した葛城の円大臣や眉輪皇子とともに殺され、「新漢槻本南丘(いまきのつきもとのみなみのおか)」に合葬された、とあります。

なお、この大草香皇子から眉輪皇子へと続く「クサカ皇子家」が、6世紀の継体天皇につながるという説もあります。

現在宮内庁の管理する「坂合黒彦皇子墓」は、安政年間(1854 - 1859)に大淀町今木字ジヲ(ジオウ)の地に比定されたものです。これは、大草香皇子の養育氏族だった日下部氏が伝えた伝承で、「新漢」は文脈からいっても葛城地域の「イマキ」と考えるのが自然です。

ただし、眉輪(目弱)皇子の伝承地は葛城地域にはなく、今のところ大淀町にしかありません。彼の鎮魂という意味では、「坂合黒彦皇子墓」が果たしている現在の役割も、ちいさくないのです。

想うかたちはさまざま

今大淀町では、地元今木地域の活性化とあわせて、ゆかりの地を歩く、イラストをつくる、カルタにして味わう、物語をつくって歌う、など、「タケル皇子」を考える活動が進行中です。

はかにたち たけるのみこに おもいよせ

(おおよどふるさとカルタ 2013 製作)

もちろん、地元の方々だけでなく、タケル皇子を愛する多くの方々が、研究や学習活

動をすすめています。悲哀の生涯をおくった幼皇子の語りごとは、子どもから大人まで、多くの人々に共感をあたえ続けるのではないのでしょうか。史実を明らかにすべき、という(硬派の)意見もひろく包括しながら、「タケル皇子」との多様なつながり方を重視し、あらたな物語が綴られてゆくというプロセスも、今大切なことだと思います。

おわりに

記紀万葉の歌がたり

記紀万葉の古代歌謡は、複雑なわざ(テクニク)や比喩(メタファー)がそれほど多用されず、直観的にわかる歌がほとんど、といえます。そのなかでも、斉明女帝が渾身の心をこめて歌いあげたタケル皇子への挽歌は、何物にも比する事のできない魅力をもっています。

古代の文学と伝承は、文字を目で追いながら考えるより、(古代の心に戻って)直観的に理解する、心で深く味わうことが大切です。そこから、私たちの心をより豊かにしてくれる歌の魅力が、保久良古墳の琥珀玉のようにきらきらと輝いてみえてくるのだと思います。

斉明女帝が「後世に伝えよ」と遺言したタケル皇子への挽歌は、今も、多くの人々に語り伝えられています。しかし、その歌の風景はあまりにも断片的で、そこから、ほんとうのタケル皇子の姿を明らかにしてゆく作業は、なかなか至難のわざです。

至難とはいいいながら、今回の試みでは、もうひとりの幼皇子・ホムチワケ皇子の伝承とタケル皇子の伝承のつながりを探してみました。すこしずつですが、忘れられた「琥珀

珀色の記憶」をたどってゆくことで、タケル皇子の生きた時代にタイムスリップできるかもしれません。

今は西暦 2018 年。奈良県が進めている「記紀万葉プロジェクト」は、古事記の編纂が終了した 712 年から 1,300 年後の 2012 年に始まり、今から 2 年後の 2020 年まで続きます。これは、奈良県に眠っていた記紀伝承や万葉集の故地を、もういちど現代風に「生まれ変わらせる」プロジェクトだといえます。大淀町今木の保久良古墳はまさに、その記紀伝承の故地、タケル皇子に出会う地域と場の象徴といってよいでしょう。

そのために、故地を預かる「地域」の人々の底力が試されています。国や行政や研究者の思惑で、「地域」が壊されてゆく場合もすくなくありません。タケル皇子の物語を、守り伝えて行く「地域」と「場」が、今求められているように感じます。

保久良古墳の調査にかかわった大淀町の文化財担当者として、多くの学問的課題とつながりを背負っている事に、私なりの責任を感じています。私にできることは、保久良古墳とタケル皇子の伝承の意義をひとりの「語り部」として語ることにある、と思っています。

これを機に、考古学や古代史・文学史だけではなく、タケル皇子を想う多くの方々と交流のなかで、物語を深めながら、タケル皇子のささやくような声に、みなさんも耳をかたむけてみて下さい。

この小論を書くにあたり、大淀町文化財調査会のみなさんや、地元今木地区の多くのみなさんに「勇気」を与えていただきました。記して感謝いたします。

【参考文献】

- 里中満智子「第 4 章 建皇子」『天上の虹』1983～2015 年。
- 阿部真司「ホムチワケの物語—その伝承形式と伝承者の考察—」『高知医科大学一般教育紀要』第 6 号 1990 年。
- 上野誠『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼—』雄山閣出版 1997 年。
- 大淀町教育委員会編「付吉野郡内の横穴式石室墳（平成 22 年度の調査）」『平成 19～22 年度大淀町文化財調査報告』2011 年。
- 大淀町教育委員会編「保久良古墳（平成 23・24 年度の調査）」『平成 23～25 年度大淀町文化財調査報告』2015 年。
- 神崎勝「皇極（斉明）天皇の出自をめぐって」『立命館文学』618 号 2010 年。
- 小島俊次「歴史編第一章 考古学 今木の古墳」『大淀町史』大淀町 1973 年。
- 松延秀一『建皇子（タケルノミコ）論—「唾」だった、天智の子—』2010 年。
- 塚本澄子「孝徳・斉明紀の挽歌における詩の成立の問題—類歌性をめぐって—」「斉明天皇—その歌人的性格について—」『万葉挽歌の成立』笠間書院 2011 年。
- 西本昌弘「酒船石遺跡と建皇子の今木谷墓」飛鳥史学文学講座（12 月）資料 2012 年。
- 西本昌弘「建皇子の今木谷墓と酒船石遺跡」『飛鳥藤原と古代皇子権』2014 年。
- 松田度「保久良古墳（第 1 次）の調査」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 年報 —平成 24 年度—』2013 年。

一人の声の重さについて



かわむら ゆり
川村 優理

プロフィール：

1958年、奈良県五條市生まれ。亡父川村たかしは児童文学作家。大阪外国語大学タイ語学科卒業。タイの昔話を日本語に翻訳。主たる研究テーマは異類婚姻譚。玉川大学で学芸員資格を取得。現在登録有形文化財「藤岡家住宅」を管理するNPO法人うちの館（やかた）で館長を務める。大淀町文化財保護審議会委員。五條市史編纂委員。エッセイスト、童話作家などとしての活動も多い。趣味は俳句。

『古事記』中つ巻、に、本牟智和氣御子（ホムチワケノミコ）という皇子の話があります。この皇子は『日本書紀』では誉津別命（ホムツワケノミコト）と記され、二つの書の内容には違いがありますが、二書に共通する内容だけを簡単にご紹介するならば、次のような内容になります。

ホムチワケの物語

—— 本牟智和氣御子の父は垂仁天皇です。お母さんの沙本毗売（サホビメ）は、自分の兄の起こした反乱に巻き込まれ、本牟智和氣御子は、その戦乱の燃える城の中で生まれました。ショックのためなのか、ひげが長く伸びて胸まで届くほどの年齢になっても話すことができません。

天皇が心配していますと、ある日、空を飛んでいる白鳥を見て一言を發しました。天皇は喜び、兵士にその鳥を捕まえさせますが、本牟智和氣御子は、鳥を見ても、もう話をしませんでした。

落胆した天皇が眠っていると、夢に出雲の神が現れ、「自分の神殿を立派にすれば、御子は話をするようになるだろう」と告げました。そこで、天皇は御子を出雲に行かせて、出雲の神のために大きな神殿を建てます。その結果、御子はいくつかの苦難を乗り越え、とうとう話をするようになるようになりました。 ——

『古事記』には、この本牟智和氣御子のほかにも、現代の観点からすれば、「問題を抱えた子ども」が登場します。

たとえば伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）から水蛭子（ヒルコ）が生まれますが、現代語訳に付けられた注釈の一例には「ひるのような骨無し子」とあり、続いてうまれた淡嶋（アワシマ）と共に「子の例（かず）に入れず」「不良（さがな）し」と、書かれていて、葦の舟で流されてしまいました。

須佐之男命（スサノオノミコト）は、長いあごひげが胸に垂れるまで、激しく泣き

わめき、その泣くようすで、青い山は枯れ、河や海が枯れたとあります。

同じく『古事記』に登場する阿遲志貴高日子根神（アジシキタカヒコネノカミ）は『出雲国風土記』によれば、幼い頃、その泣き叫ぶ声が大きかったので、静かになるまで船にのせて八十島を巡ったり、高屋を作って梯をかけ、それを上り下りさせました。

障がいを持っていたり、出生時に問題を抱えていたり、何かしら「負」の特徴を持ち合わせている子どもは、昔話などにも登場します。

桃太郎は、桃の中に入ってどこかから流れ着いた子どもで、おじいさんとおばあさんに拾われました。一寸法師は、とても小さい人です。金太郎は、武士であったお父さんが都で殺されてしまったため、お母さんと山奥に逃れて暮らしていました。

ところが、このようにさまざまな「難題」を抱えて育った人が、自分の力でそれを乗り越えることによって、悪者を退治し、国を作り、英雄となります。

本牟智和氣御子が話せなかったことが発端になり、出雲の神殿は整備され、出雲と大和が大きな結びつきをもちました。

素盞鳴尊は八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治して新しい国土を作り、水蛭子は流された先々に幸せをもたらして蛭子（エビス）信仰と結びつきました。

本牟智和氣御子の物語に代表されるような、「負」の要素は、新しい何かを起こすために必要な、ある種のエネルギーを引き起こすきっかけともなるのだと、『古事記』をはじめとする多くの物語が、伝えていきます。

一人の子どもが背負った深い悲しみこそ

が、そこに、次への扉を現出させるものであってほしいと、人は、語り継ぐ物語を通して、祈ってきたのではないのでしょうか。

一人の声から

今回、「ボイス・オブ・タケル」として、建皇子（タケルノミコ）という一人の少年の声に耳を傾けようとする取り組みが、ただ、彼の悲しみに心を寄せようというだけの企画に終わらなかったのは、建皇子の発せなかった声が、時代を新しい何かに結びつけていく大きな力を内包していたからではないかと思います。

大淀町の呼びかけに応募なさった建皇子の作品にはどれも、千数百年の時を超え、国が作られていく時代に生きた多くの人々の言葉を等身大で受け止めようとする気持ちが、溢れていました。

『古事記』や昔話のように、障がいを抱えた子どものことを物語にするという作業を通すことで、人にとっての障がいとは何か、生きるとはどんなことなのか、という大きなテーマを投げかけています。

また一方で、彼が生きていた時代や土地について考え、この土地の物語を作ろうとしています。

それは、建皇子は何を語りたかったのか・・・ただそれだけを問いかけることが、大きなエネルギーに結びついたからといえましょう。

私は、この場に参加し、ともすれば聞き逃してしまいそうな、たった一人の声を聞く、ということの、その意味の大きさに気づかせてもらったことに、ここで改めてお礼を申し上げたいと思います。

おおよどちょういまき ほくらこふん 大淀町今木・保久良古墳について

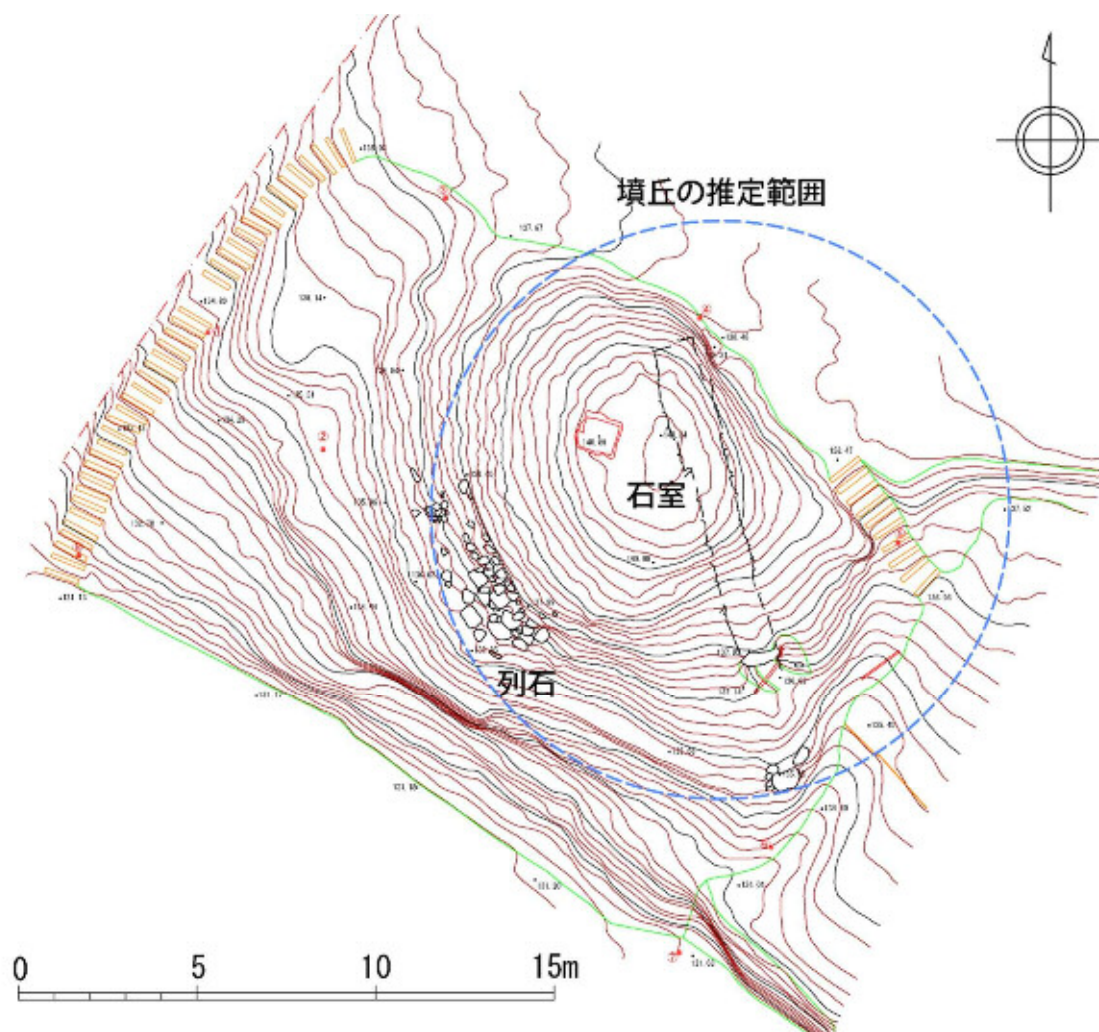
古墳の場所と特徴

保久良古墳というのは、大淀町の西の端、御所市に近い大字（おおあぎ）今木にある古代のお墓です。

そばをとおる国道309号線から、北側の丘をみあげると、大きなヨノミ（エノキ）の巨樹の木陰に、こんもりとまるい、土の高まりがみえるでしょう。これが古墳の丘、墳丘です。その片隅の、しめ縄をはった鳥居の

下に、ぽっかりと洞穴のような入口がひらいています。これが石室の入口です。

石を積み上げた入口から、通路のようになっている、せまい部分（羨道：せんどう）をさらに奥に進むと、大人でも立てる広い部屋（玄室：げんしつ）があります。この玄室に、お墓の主は眠っていたのです。このような、羨道と玄室でつくられた石室を、横穴式石室（よこあなしきせきしつ）といいます。



▲保久良古墳の測量図

保久良古墳の横穴式石室は、入口から玄室までの長さが 9.5 メートルあります。玄室は、長さが約 3.5 メートル、横幅が 1.5 メートル、高さが約 2 メートルあります。それにたいし、墳丘の大きさは、直径が約 16 メートル、高さが約 5 メートルあります。

墳丘は、後世にずいぶんと削られていますが、残っている部分から復元すると、もとは円形（えんけい）だったとわかります。

これをもとにして、前のページのような、空の上から見た図が描けます（石室は直接みえないので、透し図で描いています）。

この図は、上が北の方位を示していますので、石室が南の方を向いていることがわかるでしょう。墳丘の西側には、「列石」という文字を入れています。ここからは、たくさんの石が積みあげられた状態でみつかっています。そういう目でみると、石室の入口の南側にも積み上げた石が残っているでしょう。つまり、墳丘を造るとき、そのすそ部に、土留めの役割をはたす石列をもうけていたのです。こうすることで、墳丘が崩れないよう、工夫していたのですね。

石室の図をよく見て下さい。「石室」と書かれた文字のすぐうえには、ちょっとした“でっぱり”がみえます。これを、わたしたちの着る服にたとえて、「袖（そで）」と言います。玄室と羨道の壁の、ちょうど境目にあたる部分です。この袖は 10 センチ程度しかなく、反対側の石室の壁にはありません（この場合は片袖といいます）。

このような墳丘と石室の特徴から、古墳が造られた年代を考えるのが、考古学者の仕事ですが、おおむね 1,400 年前、7 世紀の前半代に造られた古墳といえそうです。でも、さらに詳しい年代を決めるために、石室のなかに埋まっているものを調べることも必要です。

古墳からみつかったもの

2012 年、町の教育委員会がはじめてこの古墳の調査をしました。そのとき、石室のなかから、長さ 2 センチくらいの赤い「コハク玉」がみつかりました。コハク（琥珀）というのは、天然の樹脂（じゅし）がかたまった化石で、奈良県やその周辺ではとれません。



▲保久良古墳からみつかったもの（左：琥珀玉 右：須恵器の一部）

おそらく、コハクの名産地として知られる、岩手県の久慈(くじ)という、奈良県から遠く離れた海沿いの地だとれたものと考えられます。色がきれいなので、古代からペンダントによく使われました。

そして、2017年の1月に行われた調査では、石室から新しい発見がありました。それは、灰色で硬い須恵器(すえき)と呼ばれる古代のやきものでした。壺(つぼ)もしくは瓶(へい)と呼ばれるうつわの口縁部(縁の部分)で、外面には櫛で描いたような文様もあります。7世紀のものでしょうか。

このコハクと須恵器だけで、古墳の年代を決めることはまだできません。でも、葬られた主がつけていたペンダントの一部と、その主のそばに添えられた壺のかけらがみつかったことで、古墳の主がわたしたちの身近な存在になってきました。

保久良古墳のこれから

保久良古墳が、幼くしてなくなった天智天皇の子、建皇子の「もがり」をおこなうために造られた塚だという話は、みなさんも耳にしたことがあるでしょう(もがり塚というのは、亡くなった人が正式に葬られるまでの間、仮に設けられるお墓です)。

保久良古墳がほんとうに「もがり塚」だったのかは、まだわかりません。でも、その言い伝えを語り継ぎ、信じ続けてきた地域の人たちがいるということも、大切です。

長い間忘れられていた保久良古墳は、多くの人々に支えられて、ようやく古墳公園として整備され始めました。

これからもながく古墳が保存され、みなさんの憩いの場として活かされることが、古墳の主の願いだと思います。

(大淀町教育委員会 松田度)



▲空からみた今木の里と保久良古墳(写真の中央下・東から)



『VOICE OF TAKERU』協力作品「保久良古墳と建皇子」(絵 杉本幸子)



あとがき

生まれたときから話すことができないまま、わずか八歳で亡くなった小さな建（たける）皇子は、赤ちゃんのころ、お母さんを亡くしています。

齊明天皇であるおばあさん、その手伝いをする中大兄（なかのおおえ）皇子というお父さん、お父さんの弟の大海人（おおあま）皇子、大きくなるとそのおじさんの后（きさき）となつたふたりのお姉さん、大田（おおた）皇女と鷗野（うの）皇女。このお話に出てくる人たちは、大和が国としての形を成そうとする時代を生きました。争いが起こり、たくさんの方が亡くなりました。

私は、建皇子をかわいそうに思いました。でも、かわいそうなだけではなかったはずだとも思ったのです。建皇子が大人になっていたら、りっぱな天皇になって、平和な国を作ることができたかもしれません。私は、このお話の中で、建皇子に、思いやりと希望を託そうと思いました。そして、このお話を読んでくれる子どもたちにも託します。子どもたちが、明るい未来へ歩いていくお手伝いを、私たち大人もきちんとできる存在でありますように。

とうさま むらさま

けだかく こどく むらさま

ひとの きもちが わからずに

まいにち なやんで こらえている

おじさま きんいろ

なにかもに ふりそそぐ きんいろ

その かがやきが まぶしくて

おそびに いくと めがくらむ

いちのねえさま ももいろ

あまく やわらか ももいろ

たけるはずと やさしい まままで

いてねと ぼくの てを つつむ



このねえさま あかいろ

もえあがる ひ あかいろ

まけては だめと つよい めで

そとの ひかりを ゆびさした

ぼく にじいろ

みんな あわせて にじいろ

はなせなかった ことばたちが

こころに たまって まざりあい

ぼくの ねがいも にじいろに

どうか

みんな なかよく くらせますように

「きつと あそびには すこしだけ あめが ふって
いるわ。そうよね おばあちゃん」

「そうね。こども もうすべ あめに なるわね。」

そろそろ かえりましよう」

おばあさまが いったので みんな ならんで

じじをみてから ゆっくり おうちへ かえりました。

たけるは こころの なかで のはらの みんなに
さよならを いいました。

たけるは 八つとき このよを さりました。

そらの もっと たかい だれにも みえない

にじの むこうへ 行って しまったのです。

たけるのことが だいすきだった おばあさまは

まいにち なきました。

あるひ おばあさまは たけるが かいた てがみを
みつけました。



それは たけるの ねがいが こめられて

うつくしく かがやく ように みえました。

おばあさまは そのかみを ちいさく たたんで

たいせつに している たからの はこに そと

いれ やつと なみだを ふきました

かあさま みずいろ

うすい うすい みずいろ

くもへ そらへと とけながら

かぜに なって そよいでる

おばあちゃん あいろ

ふかい ふかい あいろ

あらしい つづく かなしみを

ふかく しずめて ほほえみ くれる

おじいさま かつらと じいさま いらがいつ

ついでにじいさま かじいさま おじいさまが

そのおてつだいを していることを おばあさまが

ずっとまえに おしえて くれました。

そして おばあさまが いちごだけ

つばいだじいさま たけるは おぼえて います。

「たけるの とじいさまも たけるの よじい

みんなと なかよく できたら いいのねえ」と。

かぜは たけるを なでるように なみさな

ぶきながら いいました。

「たける ほら にじが でてるわ」

「ほんとだ」

おおきな おおきな にじが おやまに かかって

いました。

のはらの みんなと きれいだなと みていました。

しばらくすると たけるを よびこえが きこえて

きました。

このねえさまが はじつてきます。

「たける！ ひとりで きたの？」

たけるは うなずきました。

いちのねえさまも きました。

「じいじ いたのね。おばあさま たけるは

だいじょうぶや」

いちのねえさまの うしろから おばあさま

ゆっくり やつてきました。

「まあ たける ぶじで よかったわ」

おばあさまは たけるを きゅつと だきしめました。

たけるは ごめんなさいと いう かわりに

ぺこりと あたまを さげました。

そして にじを ゆびさしました。

「まあ すてき」

このねえさまは かけだしました。





「きのう いちのねえさまと おはなを

つんでいたね。」のねえさまは はじっていたね

と いいました。

きのう たけるは おばあさまと ふたりの

ねえさまと いっしょに さんぽを していたのです。

「ぼくたちは ずっと まえに たけるの

おとうさんと おじさんを みたよ」

と じめんに ならんで すんでいた ありが

と まって いいました。

「じつても こわい かおで おはなし していたよ」

たけるは (おとうさまと おじさまが けんか

したのかな) と おもって すこし かなしく

なりました。

たけるは じいさまと おじさまには あまの

あうことが ありません。

とうさまは おおはあさまの かわりに おとうさまの



するじ ちょうちょうは わらいながり

「そだね。きょうのかぜは かあさまの ようじ
やさしいから ほんとに ゆっくりとくるわ」
と いいました。

たけるも わらって ちょうちょうの あじを
ついでいくの はらじ つきました。

いつも ねえさまたちと あそんでいる のはらです。
ちいさな はなが さいます。

たけるの しらない ちいさな むしも たくさん
います。

とおくに おやまが へんじ みえます。
たけるは この のはらが だいですきです。

「じいちは たける」

たけるの あしもとから いえが しました。
よくみるじ はっぱの むきじ とくじはじが
います。

「うきまじょう。おじいじい せんじおじいさま
まじいじいじい」

ちゅうちゅうが おうおうとう ちゅうちゅうに
ひらひら おにわへ とんで いきました。

かぜも わらった ようでした。

たけるは ぴんぴんと おにわへ できました。

するし ちゅうちゅうの じゅうりが たけるの あたまに
とまって いました。

「まじいよ たける。かあさまが ぼくを しかるんだ。

ちやんと じいじいを たべなさいって。ぼく

おやつが たべたいのに。たけるの かあさまは

おやつを くらえ。」

「ぼく かあさま いないんだ。あかちゃんの

ちゅうちゅう。でも おおおあかちゃんが おやつを

くらえよ。ちやんと じいじいを たべてからね」

じいじい ちやんと じいじい じいじい じいじい



かぜは わらいながら

「じいじい たける」

と いました。

たけるは すじい はずかしそうに

「だって おおあかさまを じいじいには いけない

でじい」

と いました。

「おおきく なったのね。おかあさまが いなくても

たけるは さみしくは ない。」

「ぼく さみしく ないよ。おおあかさまは いつも

いっしょに いてくれるし ぶたりの ねえさまも

いっしょに あそんで くらえ。」

かぜが さーっと たけるの かみを きました。

(かぜさんは かあさま なのかも)

そう おもった たけるは ちいさく 「かあさま

と いて みました。

たけるのじい

むかし むかし やまのくじい たけるじい
ちいさな おうじさまが いました。

まわりの 人は たけるのみこさまと よびました。

きょうは かぜも おひさまも ぶんわり やわじい
ひです。

おにわが みえる あかるい へやで たけるは
めを とりました。

（ あれ ぼく じいのまに ねちゃったんだらうじい
あたりを みまわしても だれも いません。

いつも そばに いてくねる おばあさま
いないのです。

おばあさま と ねぼしじい



（ あ ぼく おはなし できないのだった
と やめました。

たけるは おはなし することが できないまま
おおきく なったのでした。

でも じいじいの なかでは たくさん おはなし
しています。

「よく ねたわね たける」

はなしかけて きたのは かぜでした。

「うん」

たけるは こたえます。

「はるに なって きもちいい ものね」

おにわから とんできた ちゅうちゅうも
はなします。

「じいじい おおんぼ じいじい」

おにわの もものまに じまじいじい じいじい
います。

ボイス オブ タケル 『VOICE OF TAKERU』 募集作品について

大淀町では、2017年に「第32回国民文化祭・なら2017 第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」の一環として、本町ゆかりの古代史上の人物、建皇子を語りつぐ絵本作品を募集いたしました。

日本各地から計10作品の応募があり、審査の結果、特選賞1作品、入選賞2作品、佳作賞7作品が選ばれました。応募いただきましたみなさまには、この場をかりて深く御礼申し上げますとともに、建皇子への思いをさらなる作品につなげていただければ幸いです。

本資料集では、特選賞受賞作品となりました「たけるのにじ」を掲載させていただきます（ii～ixページ）。どうぞじっくりと、お楽しみ下さい。

●応募作品一覧（敬称略）

No.	作 品 名	作 者	住 所	審査結果
1	おおよどの皇子（奈良）—タケル王—	おおにしりのりこ 大西規子	東京都	佳作
2	皇子の琥珀	もりのさとこ 守野聡子	横浜市	入選
3	ノドアメ	なかいともこ 中井智子	愛知県	佳作
4	あなたは悲しみをみた～建皇子のために～ 鳥に歌を教えるために～建皇子に～	すずきかつや 鈴木勝也	京都市	佳作
5	幼い賢者、建皇子を偲ぶ	もり かずお 森 一勇	生駒市	佳作
6	VOICE OF TAKERU	坂本美佐 絵 もりもとえつこ 森本悦子 文	明日香村 大淀町	佳作
7	たけるのにじ	おおいわね 大岩根るり子 (四葉るりこ)	五條市	特選
8	紙芝居 たけるのみこ	おかもと かちよ 岡本佳千予	大淀町	入選
9	さいめいさんと私 —ボイス・オブ・タケル—	いしかわ ただし 石川 正 文 すぎもとさちこ 杉本幸子 絵	大淀町 大淀町	佳作
10	たけるのみこ	いわさきまさたか 岩崎庄隆	大淀町	佳作

作品審査員（敬称略）：

・外部審査委員

川村優理（NPO法人うちのの館館長・作家） 松延秀一（近畿叢史研究グループ正会員） 渡邊直加（絵本作家）

・実行委員会審査委員

岡下守正（大淀町長 国文祭・障文祭なら2017大淀町実行委員会会長）

中村吉成（大淀町副町長 同実行委員会副会長） 上田敏之（大淀町教育長 同実行委員会副会長）

種田知子（大淀町教育委員会文化振興課長 同実行委員会事務局） 松田度（同課主任技師 同実行委員会事務局）

※作品の一部については、本資料集の表紙およびカット絵に使わせていただきました。

※No. 6の作品については森本悦子さん（おおよど語り部の会）に文を、No. 9の作品については杉本幸子さん（故人）に絵を補足していただき、絵本作品として仕上げました。ご協力ありがとうございました。



【表紙絵の作者】

大淀町地域遺産創生シンポジウム資料集
ボイス オブ タケル
「VOICE OF TAKERU 2018」

— 2018年11月18日（日）於 大淀町文化会館あらかしホール —

発行年月日 平成30年11月18日
 編集・発行 〈ボイス・オブ・タケル〉実行委員会（大淀町文化会館内）
 〒638-0812 奈良県吉野郡大淀町楡垣本2090番地
 TEL：0747-54-2110 FAX：0747-54-2112
 印刷 岡本印刷所
 〒639-3126 奈良県吉野郡大淀町新野342番地2
 TEL：0746-32-2166 FAX：0746-32-2188



保久良古墳・春